

視聴メディアと連続テレビ小説

—テレビ離れから見る視聴環境と理想の女性像—

山口 和香

1つの番組によって、社会現象・ブームが起こるほど、多くの人々にとってテレビは生活必需品である。テレビが社会に与える影響は非常に大きいことと同時に、影響を及ぼしたことによる視聴率の変化も顕著である。だが、SNS やスマートフォンなどのデジタルデバイスの普及率が上がる近年、そんなテレビと視聴者との間に「テレビ離れ」という現象が起きていることは有名な話であるが原因や解決策が詳しくは検討されていない。本稿では、時代の変化による「テレビ」の存在価値やメディアの衰退を明確にし、現代、そしてこれからの社会にとってどのようなものが求められているのかという改善策を検討していく。

第1章では、先行研究や各種データからテレビ離れの現状について整理した。保有率は90%を越えていながらもネット利用率が上昇傾向にあり、これからは年齢関係なくさらなるテレビ離れが逃れられない現実が明らかとなった。ただ、ネット利用の方法としてテレビを見「ながら」ネットを利用するという人が多いことも明らかとなった。第2章では、フジ月9ドラマと連続テレビ小説を比較し、ターゲット層・放送時間帯・視聴環境の違いを検討した。これらから、連続テレビ小説の安定した視聴率を得るための要素を考察した。連続テレビ小説は、世代を超え引き継ぐ形で新たな視聴者を生み、時代が変わっても朝の時間帯の生活行為は大きく変化しないことから、生活リズムに組み込み視聴習慣化しやすいことが明らかとなった。第3章では、110作目「虎に翼」を具体的な事例として取り上げ、歴代の作品との比較、作品の魅力について分析を行った。主人公は、作品の時代背景において成立しづらかった「女性への特別視」ではなく、「自分らしく生きる」という価値観を持ち葛藤する。現代的とも言える価値観が多くの視聴者の共感を呼んでいた。第4章では、これまでの考察をふまえ、現代においてテレビが視聴者を獲得する条件について検討した。

以上から、「世相を反映したコンテンツ」と視聴者の生活リズムに寄り添った「放送時間」が重要な条件であることが分かった。時代の生活環境と社会的関心に沿ったコンテンツの存在は、今後のテレビ視聴においても非常に重要であり、視聴メディアが揺らぎ合う現代に生きる存在としてさらに検討していきたい。